

# 企業的農業経営に挑む

県農業コンクールから  
みた農業者の横顔

日本経済の高度成長に伴い、農業は他産業との生産性の格差、所得の格差が顕著となつて就業者が急に減少し、農業が全産業中に占める比重は、就業者数でも、生産所得でも次第に低下しているといふ。

更に近年の貿易の自由化並びに資本の自由化などは、これに拍車をかけ、農業をとりまく諸情勢はますます厳しさを加えるであろうとする見方が強くなつてきている。

このような厳しい社会経済情勢の中で、農業者たちはどのような新しい動きをしていくのであろうか。昭和三十五年からされている農業コンクールに参加した農家の経営改善の中に、幾多の創意と工夫が集積されており、これらの新しい動きを伺い知ることができるのである。以下は、その注目すべき共通点である。

## 企業経営の展開へ

### 経営規模の拡大

経営規模の拡大が要請されながら、実現しにくいのが現実であるが、経営耕地面積の拡大、飼養頭数の飛躍的増大、固定施設の積極的導入などという形で現わ

れている。先祖伝来の田二畝をいさぎよく手放し、この代金で荒廃地十畝を購入し、規模拡大したという例があるが、この経営主は、土地は農業生産の手段であり、目標ではない。従つて、農業生産のために有利であるならば、先祖伝来の土地を手放すことに、いささかの感傷もしはさまないという経済合理性に徹している。そして、この荒廃地は今日、見事に開田され一田地にまとまつたこの耕地は、企業的農業が展開されるにふさわしい条件を備えるに至っている。

また、戦後零から農業をはじめたという父を持つ青年は、肥育牛を常時八十頭飼育して、世間の注目を集めているし、サラリーマンを主人に持つある夫人は、農作業の片手間に肥育豚二百五十頭を飼育し、年間一十頭を出荷しているといふ。

またある兄弟は経営規模が分家によって零細化するのを防ぐため、協業経営をはじめ、田四畝に乳業三十頭を飼つており、農業企業を営むというA氏は十畝のみかん園を開園し、自動車による通勤農業をやっているなど、青壮年層を中心とした規模拡大レースは、そのとどまるどころを知らないかのようにある。しかも、その粗収入は八ケタにも及ぶも

のが輩出しはじめたことは驚くべきことである。

しかし、いずれも、多くの資本を投下し、合理的な採算を考え、立派な企業的経営を営んでいるが、雇用労働はできるだけ少なくし、夫婦だけ、またはその他を加えた家族労働を主体とした経営を行っていることが注目される。

## 資本投下で体質改善を

### 機械化と省力化

他産業従事者と均衡する所得をあげるため規模拡大を余儀なくされながら、片や労力の不足と労賃の高騰に悩まされ、機械化や省力化が必然化しているが、このための投下資本が多額になつても、若干の犠牲は仕方がないとする考え方が一般化しつつあるようである。

ある農家は、夫婦二人で、四畝の畑と二十頭の乳牛を管理するため、中型トラクターとこれを中心とする一連の付属作業機等、多額の資本を投下していち早く導入し、労力的に無理のない経営法をみだしているし、またある青年は、分散した耕地を一カ所にあつめ、作業能率をあげるため、不利な交換分合の条件を承

知て実施し、結果的には、非常な省力になり、酪農の多頭化の手がかりをつかんでいる。

更に既成のみかん園に、自動車やスワースプレーヤーの入れる程度の農道を作るため、成木を涙をのんで、まびいた青年もある。このように、家族労働を越え、雇用労働に頼らねばならぬ分は、借金をしてまでも、多額の投資を行ない、省力化し、家族労働におきかえようとする傾向がみられる。

## 営農条件を高度に生ず

### 作目の単純化

従来多くみられた複合経営から、家族構成、市場条件、立地条件などを考慮し

本県の耕地面積は、水田八三・九千畝、畑七三・二千畝、計一五七・一千畝で従来農地の開発、改良の方向が水田におかれていたため畑地帯に比べ水田地帯は、一応整備されているが、現在まで実施された土地改良事業は僅か一〇％に過ぎない。

その大部分は海岸線地帯と県内の大河流域の平野部において、かんがい排水事業及び区画整理事業が行われている。その大部分は過去多年にわたる社会的、自然的条件に制約されながら今日まで造成、改良されてきたもの、圃場は平均三町程度と狭く、且つ不整形で、排水路は兼用に充てて農道など全く整備されておらず、耕地も一戸当たり七・六回地に分散されるなど、土地条件が極めて悪いため農業生産の隘路となっている。

## 農業構造改善と土地基盤整備

### 農業の生産性を高めるもの

ためには、経営耕地の零細分散性と資本整備の低位賃困性の問題に対処して、耕地基盤の整備と経営施設の近代化をはかりながら、農業生産の選択的拡大をはかることが大きな問題とあげられる。

(表)は、昭和三十七年度より、昭和四十二年度まで農業構造改善事業として計画認定した全地域の農業構造改善事業土地基盤整備事業種目別実績であるが、

農業構造改善事業土地基盤整備事業種目別実績

事業種目	地域数	施行回数	事業量
備前(備前)	46	55	1,411,405ha
備前(備前)	59	116	148,954m
備前(備前)	15	38	29,359m
備前(備前)	55	138	897.79 ha
備前(備前)	21	31	227.45 ha
備前(備前)	9	13	99.16 ha
備前(備前)	8	9	83.04 ha
備前(備前)	15	20	306.29 ha
備前(備前)	10	22	20.484 ha
備前(備前)	12	20	108.471 ha
備前(備前)	11	5	5.0 ha
備前(備前)	1	21	2,463.82 ha

切作らないという単純化の徹底ぶりである。

## 経営能力と感覚

「事業は人なり」というように、事業に占める人のウエイトは誠に大きい。とりわけ他産業に比べ資本集約化の遅れている農業にあつてはことさらに大きいのである。経営の成否を司るものは、経営主の経営能力と経営感覚であるといつても差しつかえないだろう。

企業的農業を営んでいる人は、いずれも、経営能力に恵まれ、経営感覚の鋭い人であるが、これらの人々に共通していることは、総じて、若くして経営の責任者になつたとか、他の職業を体験し、農業に転向したとか、戦後の素人百姓であ

それぞれの地域に即応した、みかん、くり、養蚕、乳牛、肉牛等の適地適産、主産地形成を目指す成長作物の生産拡大がはたらけ、一部の地域では既に当初の目標を突破し、または到達しつつある。

るとか、農業関係以外の学校を卒業しているとかなどの場合が多い。これは、若い人ほど経営のやり方が革新的であることや、素人なるが故に、古い伝統や技術にとらわれず、新しい経営理念と技術を謙虚に受け入れたからであろう。

その証拠に、彼等は、経営の一切を克明に記録し、経営改善の指標としてこの記録をよく活用している。経営を計数的に把握し、総合的観点から改善計画を立てて着実に実行し、すべてが計算づくめの「計算する農業」が実践されているのである。また、他産業の厳しさを体験した人は、その尊い経験が敏捷性や総合的判断力として生かされたからであろうか。

あるサラリーマン転向の酪農家は、多頭化の資金を得るため、換金作物を作付けなければならなかったが、その換金作物を選定する場合、前年度の作付面積や、市場価格から、およそ狙いをつけ、その年の種子の売れ行きを種苗店に照会し、売れ行きの少ないことを確認してから決定しているという。このようにして植付けられたゴボウは、高価で、しかも青田のまま、飛ぶように、商人に引き取られてしまうのが常であるという。これも経営感覚であろうか。

(農業改良課)

